

International University of Health and Welfare
「共に生きる社会」の実現をめざして

IUHW

2021.9.18発行

vol.126

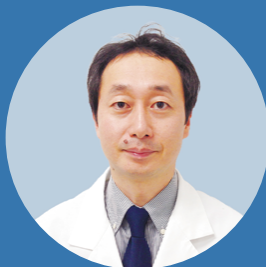


特集 コロナ対策 in IUHW

職域接種風景

1 成田キャンパス

2 東京赤坂キャンパス



和田耕治教授・加藤康幸教授・松本哲哉主任教授・矢野晴美教授 インタビュー
感染防止策／ワクチン接種



医療福祉の多彩なエキスパートを育てる。

国際医療福祉大学

特集 コロナ対策 in IUHW

COVID-19に立ち向かう本学

新型コロナウイルスの感染拡大が長期化しています。国際医療福祉大学は新型コロナウイルス発生の当初から、感染症の専門家が多数在籍し、附属病院などを持つグループの総合力を結集して、新型コロナウイルス感染症の治療や予防対策にあたってきました。学生や教職員をはじめ、地域に安心・安全な環境を提供し、高齢者接種・職域接種への協力などで社会に貢献しています。本学で感染症や公衆衛生学の専門家として尽力している4人の教授に、新型コロナウイルス禍に立ち向かう本学の姿勢や今後の対応をお聞きしました。（聞き手 広報企画部 宮下博）

「国難において発揮されたグループとしての結束」

——新型コロナウイルスに対する社会的な関心が一気に高まったきっかけの一つが、2020年2月に発生したクルーズ船、ダイヤモンドプリンセス号内の感染拡大でした。国際医療福祉大学は厚生労働省から依頼を受け、専門家を現地派遣しました。先生もその一員として、現場に入られました。**和田教授**：「本学に要請がある前から、すでに知り合いの何人かが現場で対応にあたっていた。こうした事例があれば、現場で対応するトレーニングを共に積んでいた仲間であった。本学に依頼があったのは何かのご縁と考え、現場への派遣に自ら手をあげた。自分の身は自分で守ることはできるので、怖いということは正直ほとんどなかった。最初は2泊3日くらいかなと思ったが、結局10日を超えて乗客が降りるまで対応した。また、今後の日本のコロナ政策を考えるうえで、国としても大学としても大事な機会となった」

——船に乗り込んだ時の第一印象はいかがでしたか。**和田教授**：「とても不思議な感覚だった。豪華絢爛な船内で多くの感染者が出ているが、最初は何人が感染しているのかわからない状態だった。基本的に患者との接触でウイルスが広がるのが感染症の特徴なので、まずは乗船者のどこまで広がったのか心配された。分母は約3,700人と大きかったが、最終的に2割が感染していた」

——現場での対応を振り返って、いかがですか。**和田教授**：「本学からチームとして連日10人ほどが乗船し、他の医療機関から来た方を含め皆で連携した。厚労省や関係する機関とも、よく連携し、アドバイスをいただきながら課題にあたれたのは誇りに思う」



●ダイヤモンドプリンセス号の現場で(2020年2月)



医学部公衆衛生学 教授
和田 耕治

産業医科大学卒、医学博士。
北里大学准教授、
国立国際医療研究センター
国際医療協力局を経て現職。
厚生労働省新型コロナウイルス
対策本部参与。

——大学に残した知見や経験は何でしょう。

和田教授：「もともと感染対策に詳しい専門家が本学には多かったので、実践で経験が得られたことで、自分たちの大学や病院への対策につながったと考える。特に成田病院は開院を早めるなど、実践が進んだ。熱海病院や塩谷病院のDMAT(災害派遣医療チーム)も活躍し、救急分野の先生方とも連携がとれた。組織全体として、こうした国難においてもグループで協力しあい、結束していくきっかけが作れたのは、大変良かったと思う」

——さまざまなメディアを通じて、公衆衛生学の専門家として積極的な発信を続けていらっしゃる理由は何でしょう。**和田教授**：「現在は厚生労働省のアドバイザーボードにも参加の機会をいただき、国の対策にもかかわっている。感染症対策は、ワクチン接種にしても外出自粛にしても、市民の協力なくしてはできない。協力を得るには、なぜそれをやらなければいけないのか専門家が根拠を示して納得してもらい、そのうえで政治や行政が市民との信頼感のなかで、こういう理由だから必要なんだ、とできるだけわかりやすく説明する必要がある。」

初めての緊急事態宣言発令の時には、国の意思決定の場にかかわれた。接触機会8割減という難問を日本社会が成しえて、昨春の感染はゼロに近いところまで抑え込めた姿をみて、やはり日本の国民はすごいな、と思った。何度か感染拡大の波が続くなかで、発令についていけない方が増えてきたのも事実だが、国民を守るためには必要なことは繰り返し諦めずに伝えていく責務があると感じている。私たちに信頼をいただいているわけで、間違いのない発信を続けたい」

Special interview

「地域住民の安心感にもつながる大学病院」

——新型コロナウイルス感染症の特徴は、どんなところにありますか。

加藤教授：「市中や院内で流行を繰り返しながら、世界的なパンデミックを引き起こしている。急性の呼吸器感染症であり、高齢者や基礎疾患のある方を中心に重い肺炎を起こす。新しい感染症なので、根本的な治療法・予防法は確立していない。そういう中で診療しないといけない難しさがある」

——ウイルスとしては、どんな特徴があるのでしょうか。

加藤教授：「病原体の新型コロナウイルスはゲノム(遺伝情報)としてRNA(リボ核酸)を持っている。これはインフルエンザウイルスと同じだ。想定された以上の速さで変異しており、いまのデルタ株は最初に中国・武漢で発生したウイルスとは異なり、非常にうつりやすくなっている。また、インフルエンザウイルスと同じで、発病数日前から他人にうつしてしまう。従って、本人も知らずにうつしてしまうことになる。それが感染対策を難しくしている」

——変異を繰り返すのは、このウイルスの本能なのでしょうか。

加藤教授：「これほど短期間に、世界中の国や地域でさまざまな年齢の方に患者が発生し続けるということは、ウイルスの何としてでも広がろうとする勢いを感じる」

——ここまでの感染急拡大は、予測されていたか。

加藤教授：「2003年に同じ中国で発生したSARSを封じ込めることができた記憶があり、ごく初期には何とか流行を終息できると思っていた。イタリアやイランなどでの大流行を機に、これは厳しいのではと思い始めた。その後、欧米でも本格的に流行し、医療崩壊のような状況も起きて、認識を改めた」

——日本での状況は、どうぞ覧になりましたか。

加藤教授：「これまでは欧米などに比べると患者数や死者数が少なく、うまくコントロールできていた。重症患者



●国際医療福祉大学成田病院の陰圧室(第一感染症病室)



医学部感染症学 教授
加藤 康幸

国際医療福祉大学成田病院
国際臨床感染症センター
感染症科部長

千葉大学卒、ジョンスホプキンス大学
大学院修了(Master of Public Health)。
前国立国際医療研究センター
国際感染症対策室医長
厚生労働省「新型コロナウイルス
感染症 診療の手引き」を
研究代表者としてまとめた。

も、なんとか医療機関で治療できる規模だった。しかし第5波と呼ばれるデルタ株が広がるなかでは、ベッドが用意できず医療が追いつかない状況が出てきたのは残念だ」

——国際医療福祉大学成田病院で治療の最前線に立っていらっしゃるなかで、状況などの変化を、どうお感じでしたか。

加藤教授：「いくつかの波を経験しながら、流行はもう1年半くらい続いている。最初のころは無症状の方まで入院させ隔離していたが、肺炎を起こした患者さんの治療は手探りだった。2020年夏以降になると治療に抗ウイルス薬やステロイド剤、血栓を溶かす薬を使う治療法がほぼ確立してきた。いまは高齢者のワクチン接種が進んで高齢の重症者が激減する一方、入院患者は40~50代が中心となり、20代で肺炎を起こす方もいる。医療従事者は自らの感染に不安を抱きながらがんばっているが、ワクチンの先行接種が行われ、感染リスクが小さくなったのはありがたいことだ」

——デルタ株の脅威を切実に感じていらっしゃいますか。

加藤教授：「外来患者をみていると、感染経路のはっきりしない人が増えているように思う。家庭内感染も増え、本格的に市中で流行してきたことを実感している」

——そうした状況下で本学や病院が果たすべき役割は、どうお考えでしょう。

加藤教授：「当院では早期に検査体制も整備され、発熱外来から病棟、集中治療室まで、多くの患者を受け入れている。大学病院ではあるが、地域に根差した医療機関という面もある。軽症から重症まで、きちんと治療が受けられるということは、地域住民の安心感にもつながる。大学としては、行政と連携した社会貢献、治験や臨床研究も実施されている。学生の教育面でも、パンデミックの大変さを少しでも経験してもらうことが大切かと思う」

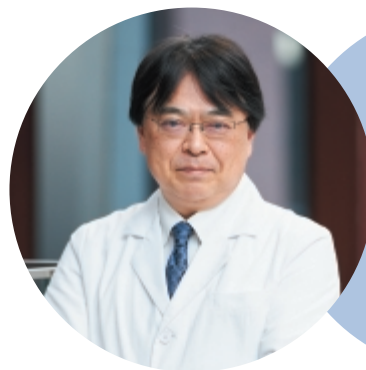
「検査・研究体制の充実で、迅速な対応を推進」

—— これまでの感染予防策などに対して、どうお感じでしょうか。

松本教授：「私自身、感染対策にかかわっている者として、結果を出す難しさを感じている。東京都に協力して、居酒屋、カラオケ店、屋形船、結婚式場など現場を訪ねて指導したり、講習会を開いたりした。また千葉県に協力して、介護施設などにも行った。それぞれの現場で感染対策を徹底するのがいかに大変かを実感したし、正しい知識を普及させる難しさも感じている」

—— そんななか、成田病院は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、国や自治体より対応を要請され、予定を繰り上げて2020年3月16日に開院し、コロナ患者の受け入れも開始しました。

松本教授：「成田空港に最も近い大学病院として、海外から各種の感染症が持ち込まれる可能性がある。そのため、当院は第一種の感染症病棟や、陰圧個室10床の感染症病棟、入口を別にした感染外来など、感染症に対応できる設計がなされている。いきなり新型コロナウイルスのパンデミックが起こるとは思っていなかったが、感染症への準備をしていたおかげで大きな問題は起こっていない。ただし、初めて顔を合わせる職員がゼロから新しい病院で働くことになったため、想像以上の苦労が続いたのも間違いはない。



医学部感染症学
主任教授

松本 哲哉

国際医療福祉大学成田病院
国際臨床感染症センター
感染制御部 部長

長崎大学卒、医学博士。
日本化学療法学会理事長、
東京iCDC専門家ボードメンバー

また研究面では、新型コロナウイルスを主な研究対象として、呼吸器や集中治療、救急救命などいろいろな領域の先生方と一緒に研究が進められるようになり、病院内では医学部のゲノム医学研究所や他学との研究プロジェクトも立ち上がっている」

—— 成田病院では、開院当初からPCRなど検査体制を整備し、患者はもちろんのこと、患者以外にも広く対応できる体制が整えられました。そのため、職員や学生になんらかの症状を認めた場合、すぐに検査を実施して感染の有無を判断し、業務や学修に支障が出ないような体制が取られてきたのも本学の特長だと思います。

松本教授：「検査の徹底や迅速な対応が実施できたお陰で、院内ではクラスター感染は起こっておらず、感染者は出ても被害は最小限に抑えられている。学生も臨床実習前の検査をはじめ、同じクラスの中で陽性者が出た場合は広い範囲で検査を実施して対応しているので、大学でもクラスター感染は起きていない」

—— ワクチン接種の効果はいかがでしょう。

松本教授：「すでにワクチンの接種率が高い高齢者の感染は抑制されており、かなりの効果が期待できる。ファイザーやモデルナのワクチンは有効性が95%近くと驚くべき数字で、無症状の感染まで抑える効き目が期待されている。副反応を恐れて見送る人も出ているが、機会を逃さず接種することをお勧めしたい」

—— 「アフター・コロナ」の見通しはいかがですか。

松本教授：「残念ながら変異株の影響もあり、このままワクチン接種が行き渡れば感染症が終息するという楽観的な見方はできないかもしれない。世界的に見ても、完全に抑え込めている国はわずかで、今後も大丈夫と断言できる国はない。この感染症が世の中から無くなってしまうことは難しいと思うが、せめて6~7割の人がワクチン接種を完了して、社会がある程度安定できる状況にしていく必要がある」

「大学人として身に余る光栄と感じた大会組織委の理事任命」

—— 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の理事に選ばれたときのお気持ちは、いかがでしたか。

矢野教授：「急なお話だったが、貴重な機会をいただいた。理事の構成をみると、歴代のオリンピック選手をはじめ、政治家や関連団体の会長など、そうそうたるメンバー。新たに入った12人もスポーツ団体や学術団体まで出身は幅広く、自分は感染対策の専門家ということでの任命を強く意識した」

—— 五輪の開催には、さまざまな議論があったのでしょうか。

矢野教授：「3月の就任以来、理事会や理事懇談会のほか、情報共有と議論のためにご提案した専門家ラウンドテーブルが設置、開催された。大会の開催ぎりぎりまで折衝があった。理事会には、五輪憲章や歴史の専門家の方もいらっしやり、観客が居ても居なくても、4年に一度アスリートが集まる平和の祭典として開催すること自体に意義がある、という意見が出た。組織委員会は、運営を担う組織のため、基本的にはどのようにしたら開催できるのか、という議論が中心だったが、延期や中止に関する発言や意見交換もあった。無観客にはなっても、なんとか開催には至ったので、あとは無事に終わるのを祈った」

—— 選手などへの感染対策はどうでしょうか。

矢野教授：「来日する選手・関係者の人数は、国際オリンピック委員会(IOC)のほか多数の関係団体と組織委員会が交渉し、当初の約3分の1に抑えられた。海外から来日する選手団等に対しては、いわゆるバブル方式を採用し、IOCが承認した対策で、徹底した検査態勢が整えられた。選手村は理事就任後の5月末に、専門家ラウンドテーブ



●オリンピック会場での医療協力業務で



医学部感染症学 教授
矢野 晴美

医学教育統括センター
副センター長
国際医療福祉大学成田病院
感染症科

岡山大学卒、医学博士。
前筑波大学医学医療系教授

ルとして視察し、現場での運用を確認した。6月末の開院前には、理事会・評議員会でも再度、視察し、再議論した。種目によって感染対策は異なり、屋内・屋外でキーポイントが異なる。屋外は基本、常に換気されているのでリスクは小さいが、屋内では換気がきわめて重要になる。アスリートの大多数は新型コロナウイルスワクチンを接種してから入国する予定と報告された。基本的にワクチンを打った人で競技を行うことになった」

—— さらなる感染拡大が心配されますが。

矢野教授：「直感的には、新型コロナウイルス感染の世界的流行が3年目に入る来年度も、まだまだ流行は継続する。次の課題として、ワクチンの効果がどのくらい持続するのか、また変異株はどうなるか、などの問題が出てくる。ワクチンと変異株の出現・拡大によって、いわゆる人類と病原微生物のくいたちごっこ>が続くだろう。新型コロナウイルスの感染が広がる以前のように、多くの人が飛行機で制限なく動けるように戻るには、あと4~5年にかかるのではないかと推測している」

—— 本学を代表する立場としての理事就任の重みや意義は、どうお感じでしたか。

矢野教授：「大学人としてこのような大役を拝命したのは光栄なこと、自分のできる限りの貢献をしたいと思った。理事会等では、なるべく積極的に質問や建設的な提案をさせていただいた。橋本聖子会長は常に柔軟に迅速に対応してくださり、感染対策について、私との対談を公開することにもつながった。ジェンダー平等・多様性の推進においても、小谷実可子チームリーダーをはじめ関係者の方と個別インタビュー、ヒアリングや全体での会議を重ね、新理事や関係者の間で真摯な協議が行われ、大変勉強になった。本学の歴史においても、国家間の歴史的な行事に参加することになり、身に余る名誉なことだった。特に医学部としては、開学5年目にこうした大きな役割に直接かかわることができたのは、個人的にも大変貴重で光栄なことだった」

※この取材は7月下旬に行いました。

感染防止策

東京オリンピック・パラリンピック競技大会へ医療スタッフを派遣

国際医療福祉大学グループは、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の要請を受け、2つの競技会場に、計20日間にわたって延べ71人の医師を派遣した。開会式翌日の7月24日から、3×3バスケットボールやスポーツクライミングが行われた「青海アーバンスポーツパーク会場」(江東区)と、ビーチバレーボール競技が行われた「潮風公園会場」(品川区)に医師を派遣し、「青海アーバンスポーツパーク会場」ではVMO(会場医療責任者)を務めたほか、会場で選手以外の大会関係者の医療対応にあたった。

また、「青海アーバンスポーツパーク会場」では、パラリンピック競技の5人制サッカーも行われ、8月29日から9月4日までのうち5日間、同様に医師を派遣した。本学グループが、競技会場の安心・安全な運営をサポートした。(総務企画部 川口久子)

那須マロニエホテルがオーストリア五輪選手団を受け入れ

本学のグループ施設、那須マロニエホテル(栃木県那須塩原市)が、東京五輪に出場するオーストリア・トリアスロン選手団の事前合宿(7月16日～22日)の宿泊地となった。3年かけて受け入れ準備を進め、「バブル方式」で新型コロナウイルス感染対策に万全の態勢をとり、無事に選手団を送り出した。

同選手団は選手6人とコーチら計9人。出国前にワクチン接種を済ませ、羽田空港からホテルまでは直接、車で移動。那須塩原市内の運動施設でコンディショニングを調整した。PCR検査は毎日実施した。

同選手団受け入れは、市との共同事業としてスタート。選手団は2019年8月に開催されたオリンピック「プレ大会」の事前合宿で、まず同ホテルに約1週間、視察を兼ねて宿泊した。それを踏まえ、改善点の洗い出しや本番の運営を市、同選手団との3者で協議した。

その結果、期間中は一般客を入れず、専用フロアを設けるなど外部との接触を極力避けるバブル方式を採用。従業員のワクチン接種を受け入れ前に完了した。

(大田原キャンパス総務広報部 村雲克典)



●オーストリア選手団とマロニエホテル職員

赤坂山王メディカルセンター 市民公開講座「新型コロナウイルス、現状と今後の行方」を開催

7月10日、東京赤坂キャンパス講堂にて、赤坂山王メディカルセンターと大学共催の市民公開講座を行った。都内の感染が拡大するなか、会場の定員を大幅に制限し、感染症防止対策を徹底したうえでの実施となった。

前半の銭谷幹男院長からは、「コロナ禍、今やるべき対策」として、コロナ禍で外出機会が減り、衰えてしまった身体のリカバリー対策が提案された。後半は、厚生労働省のアドバイザーボードなどで感染症対策にもあたる和田耕治医学部教授が講師を務めた。「今後のコロナ動向」をテーマに、ワクチン接種が進むなかでどのような展開が予測されるのか、具体的な例も挙げつつ今後の見通しが示された。秋以降も、



●赤坂山王メディカルセンター銭谷院長



●和田耕治医学部教授の講演

東京赤坂キャンパスの市民公開講座は感染症対策に万全を期しながら開催し、災害対策や高齢者の心身の健康など、さまざまな課題を取り上げていく予定だ。

(山王病院総務課 山本悦子)

ワクチン接種

国際医療福祉大学グループは5月から随時、各施設で高齢者向けの新型コロナウイルスワクチンの集団接種を開始した。7月からは本学の関係者や近隣の学校関係者を対象にした職域接種も始め、早期のワクチン接種を推進することで感染拡大の防止に注力。関係者や地域住民の健康と安全を守るために尽力した。

東京赤坂キャンパスのW棟10階では、5月17日から東京・港区の高齢者向け集団接種がスタート。同区が用意した7か所の集団接種会場のひとつに、同キャンパスの1フロアを提供した。

成田病院にはワクチン接種における基本型接種施設としてディープフリーザーが配置され、近隣の連携型接種施設のワクチンを保管したり、その施設の要請に基づき接種方法についての説明・指導を行ったりした。また成田市からの要請で、ワクチン集団接種に向けて医師の派遣に応じたほか、6月1日と22日の2回、同市の高齢者ワクチン接種会場として成田国際ホールを貸し出し、延べ720人が接種を済ませた。同月21日から3日間は千葉県警からの依頼で、県警の接種会場に医師計9人を派遣した。



●成田病院の高齢者ワクチン接種会場(成田国際ホール)

塩谷病院では65歳以上の高齢者を対象にした個別接種を6月14日に開始し、計750人に接種。

三田病院は港区からの要請で7月から集団接種会場となり、9月末まで1日320～400人の区民の接種に対応している。病院実習へ安全に臨めるよう、小田原キャンパスの保健医療学部を中心とした学生・教員約430人のワクチン接種も行った。



●三田病院での集団接種

7月からは大田原キャンパス、成田キャンパス、東京赤坂キャンパス、大川キャンパス、国際医療福祉大学病院の5か所で職域接種が順次スタートした。各キャンパスでは、学生への接種から、教職員やその家族、地域の学校関係者らに対象を広げた。

順和会は、計3つの会場で接種業務を担い、地域貢献に努めた。東京赤坂キャンパス体育館での職域接種のほか、同キャンパスW棟9・10階での港区の一般接種(12～64歳対象)も担当(詳細はP13に掲載)。山王病院でのかかりつけ患者への接種対応を含め、各接種会場で、順和会各施設病院長を筆頭に予診を行った。



●東京赤坂キャンパスでの職域接種

本学グループは、8月16日から東京ドームで実施される文京区、新宿区、港区の住民を対象としたワクチン接種事業にも、医師や看護師を派遣している。

この事業では、3区内にある本学を含めた7つの医科大や大学附属病院が医療スタッフの派遣などで協力し、本学からは1日に医師1人・看護師2人を派遣する。1日あたり2000人以上の接種を想定し、11月18日までの計34日間で、最大約3万5000人に2回分の接種を行う予定。

熱海病院で土石流災害の被災者らにワクチン接種

静岡県は災害拠点病院に指定されている国際医療福祉大学熱海病院は7月17日、土石流災害が発生した熱海市伊豆山地区の65歳以上の一般高齢者102人に対し、新型コロナウイルスのワクチン接種を実施した。

同月3日に発生した大規模な土石流のため、同市の集団接種のうち、2回目の接種が困難となった住民が発生したことを受けての対応で、伊豆山地区の被災者らも対象となった。当日は熱海市が、伊豆山地区と熱海病院をつなぐ送迎バスを出すなどして、高齢の接種希望者の移動に配慮した。

(熱海病院総務課 村山京三)



●池田佳史病院長も接種を実施

Open Campus オープンキャンパス

各キャンパスでオープンキャンパスを開催

各キャンパスで説明会・オープンキャンパスを開催しました。
参加人数を制限した予約制やZoom利用など、
新型コロナウイルス感染対策を実施しながら、これからの医療を支える学びと仕事の魅力を体感していただきました。

大田原キャンパス 6月6日

大田原キャンパスは6月6日、今年度初めてのオープンキャンパスを開催した。

この日は、まず新井田孝裕副学長から本学の概要説明があり、続いて医療福祉・マネジメント学科の山本康弘学科長が、本学で資格を取得できる医療・福祉の仕事を紹介した。

その後、3コースに分かれて各学科をめぐる「キャンパスツアー」を実施し、教員や学生がそれぞれの特色を説明した。キャンパスツアー終了後は、来年度の入試説明を行ったほか、個別相談ブースで参加者からの質問に教職員が詳しく答えた。

新型コロナウイルス感染対策のため、従来の自由参加型ではなく事前予約での開催としたが、参加し

た高校生からは「初めて大学に来ることができ、キャンパスの雰囲気を味わえてよかった」などといった感想が寄せられた。

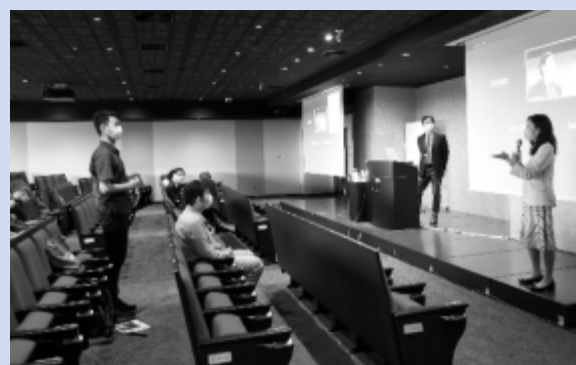


Otawara

成田キャンパス 7月3日

「7人に1人は留学生」をうたう本学医学部に優秀な外国からの学生を迎えるため、英語をベースに一部中国語を交えた留学生向けの見学会が、7月3日、成田キャンパスで開かれた。

長引くコロナ禍による入国制限は、日本で大学進学をめざす日本語学校の生徒数そのものに深刻なダメージを与えている。日本にとどまっている留学生の層が薄くなるなかで、今回はSNSを使った英語、中



●英語による説明後の質疑応答



●充実したシミュレーション設備に留学生は興味津々

国語による情報発信で繰り返しイベントをアピールした。

英語による医学部や留学生特別選抜の説明会はオンラインとのハイブリッドで実施された。この日のハイライトとなった成田シミュレーションセンター「SCOPE」の見学では、壮大な規模に参加した留学生らも圧倒されていた。

Narita

小田原キャンパス 6月6日

小田原キャンパスでは6月6日に、本校舎でオープンキャンパスを開催した。

今年度も新型コロナウイルス感染拡大のため、参加人数を限定し、午前の部の参加者は93組174人、午後の部は97組163人で開催した。藤本作業療法学科長による小田原保健医療学部への紹介をはじめ、入試ガイダンス、英語対策講座(特別講演会)では、参加者が真剣なまなざしでガイダンスを聴講していた。学科体験ブースでは、模擬授業などを通じて大学授業の雰囲気を



●在学生への相談

体感したり、在学生と積極的に交流したりと、小田原キャンパスを余すところなく体験しようとしている様子がみられた。開催時間が3時間と短かったが、参加者は対面式での開催に大変満足している様子だった。



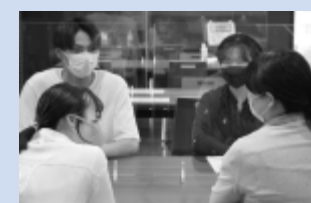
●模擬授業

Odawara

東京赤坂キャンパス 6月13日/7月18日/8月9日

6月13日と7月18日に開催したオープンキャンパスでは、総合ガイダンスで心理学科、医療マネジメント学科の教員による学科紹介、続いて教員による在学生へのインタビューを実施。また体験型の特別プログラムとして、各学科の模擬授業、「総合型選抜・学校推薦型選抜対策講義」「小論文攻略講座」も用意した。入試対策や勉強法について、参加者は熱心にメモを取っていた。

個別相談会では教員・入試ブースに加え、在学生ブースを新設。来



●在学生相談ブース

場者からは「学生さんが優しく話やすかった」「模擬授業がとてもおもしろかった」「入試対策講義が分かりやすく良かった」と好評だった。受験生、高校1・2年生にも有意義な内容なので、ぜひご参加いただきたい。



●心理相談室の見学

Tokyo Akasaka

大川キャンパス 6月20日/7月18日・25日/8月7日・22日

大川キャンパスでは、福岡保健医療学部と福岡薬学部の2学部に分かれて、6月20日を手始めに、7月18日、25日、8月7日、22日に実施。午前・午後と1日2回の開催に、多くの参加者が在学生と共に学科プログラムを体験し、入試対策講座へ耳を傾けた。

各学科では毎回、テーマや体験プログラムに変化をつけ、「オリンピック・パラリンピックを支える理



学療法士」「作業療法士の世界～ココロ・体の障害編～」 「ことばの謎にせまるーコミュニケーションを科学する言語聴覚士ー」「人のからだを分析してみよう!! ～臨床検査技師の世界～」など、楽しみながら医療専門職の役割や学科の学びを感じとってもらえるよう工夫を施した。

福岡薬学部では、同じく在学生と一緒に調剤、色の分離などを体験するプログラムが好評だった。保護者から、「目を輝かせて説明してくださる学生さんに、こういう学生さんを育て、支える国際医療福祉大学の良さを感じた」との声をいただくなど、成果を上げている。

Okawa

第25回

あいおいニッセイ同和損害保険
奨学生認証式

2021年度第25回国際医療福祉大学・あいおいニッセイ同和損害保険奨学生認証式が6月15日に行われた。

例年は東京都渋谷区の「あいおいニッセイ同和損害保険」本社で開催しているが、緊急事態宣言発令中のため、オンラインでの式典となった。本学からは今年度奨学生になった10人と大友邦学長、鈴木康裕副学長らが、あいおいニッセイ同和損害保険からは金杉恭三代表取締役社長らが出席した。

金杉社長は奨学生に対し、「コロナ禍という厳しい状況ではあるが、明るく元気に、周りの人たちへの感謝の気持ちを忘れずに日々の勉学へしっかりと励み、医療分野のプロフェッショナルとして活躍することを期待している。みなさんを全力でサポートすることをお約束する」と激励した。

これに対し大友学長は、通算225人(今年度の10人を含む)にのぼる奨学生への支援に対し、謝辞を述べた。学生に対しては、「歴史と伝統ある奨学金制度であり、選ばれたみなさんはそれぞれしっかりと志望動機、将来のビジョンを持っていることを頼もしく感じている」と、温かい言葉をかけた。

この奨学金制度は、今年で25年目の節目を迎え、昨年度までの奨学生総数215人のうち、189人が医療・福祉の現場で活躍している。(病院広報室 入澤徹郎)



●バーチャル会場で記念写真を撮影

今年度の奨学生

藤平 ほのかさん (薬学部 薬学科4年)
清水 理沙さん (薬学部 薬学科2年)
吉村 綾香さん (保健医療学部 言語聴覚学科3年)
山田 真萌さん (医学部 医学科2年)
ナウ・ワトン・ウーさん (医学部 医学科1年)
猪坂 泰子さん (成田保健医療学部 放射線・情報科学科2年)
金 恵梨耶さん (赤坂心理・医療福祉マネジメント学部 心理学科2年)
飯村 庸子さん (赤坂心理・医療福祉マネジメント学部 心理学科2年)
永井 花奈実さん (小田原保健医療学部 看護学科2年)
蓑原 涼平さん (福岡薬学部 薬学科2年)

下川宏明副大学院長、
国際共同研究の論文がヨーロッパ
心臓病学会の学会誌に掲載

国際医療福祉大学大学院の下川宏明副大学院長らの研究グループは、ローマ・カトリック大学Filippo Crea教授らとの国際共同研究(7か国、14施設)で、これまで不明な点が多かった「微小血管狭心症」に関して、「冠微小循環障害」が、心臓発作、脳卒中、心血管疾患による死亡リスクを高める重要な健康問題であることを解明した。

研究成果の詳細は5月27日、ヨーロッパ心臓病学会(European Society of Cardiology)の学会誌である『European Heart Journal』デジタル版に掲載された。

同誌は、循環器領域で世界トップレベルの学術誌の一つに数えられる(IF= 29.983)。またヨーロッパ心臓病学会は、この研究論文の新規性・重要性を高く評価し、論文掲載と同時に学会独自のプレスリリースも発表した。

今回の研究論文は、これまで不明な点が多かった「微小血管狭心症」に関して、世界共通の診断基準を用い、多数例で臨床像や予後、性差・人種差を初めて明らかにした。

(病院広報室 入澤徹郎)

小田原キャンパスにお城の回遊路

小田原キャンパスで6月24日、小田原市と関係者が出席して「小田原城天神山回遊路」の開通式を行った。

小田原保健医療学部の城内校舎は、小田原城に非常に近い位置にあり、戦国時代に北条氏が小田原城を守るために造った外郭「新堀」という土塁や堀跡が、近隣の清閑亭と旧アジアセンター敷地内などに残っている。

キャンパスのグラウンド脇で、それらを結ぶ回遊路は全長約80m。整備計画は城内校舎ができる前からあったが、グラウンド下に県道のトンネルが走っているため道路占用に関する調整や、予定地にある樹木の伐採等が必要で、開通までに数年を要した。こうしたスポットが尾根伝いにつながり、観光客や近隣住民が安全に散策できるようになった。

(小田原キャンパス総務課 松本孝俊)



●整備された史跡回遊路

大田原キャンパスの理学療法学科に「2021年度運動器の健康・日本賞」

大田原キャンパスの保健医療学部理学療法学科が、公益財団法人運動器の健康・日本協会から、最優秀賞にあたる「2021年度運動器の健康・日本賞」を受賞した。「機器を使わない運動を中心とした自助・共助・公助を生かした地域づくり」をテーマに、本学が大田原市や地域と共同で行ってきた15年にわたる活動が評価された。

大田原市とは、介護予防事業が全国的に展開される前から、機器を使用せずに実施できる運動を市内で広く普及させてきた。今年からは、市が新たに取り組みを始めた運動「コグニサイズ」でも連携を図っている。コグニサイズとは、認知症予防を目的とした認知課題を組み合わせた運動のことで、これも機器を用いずにできる。本学科としても、引き続き市民の健康維持に貢献していきたい。

今回の受賞にあたり、当初より企画に携わってこれ



●運動器の健康・日本賞の授賞式
前列左から2人目が久保晃理理学療法学科長、3人目が石坂正大准教授
た細小路岳史邦友会理事ならびに大田原市高齢者幸福課職員のみなさまに感謝申し上げます。

(大田原キャンパス理学療法学科 石坂正大)

国際医療福祉大学成田病院
脳神経外科の市民公開講座を開催

7月16日、収容定員2千人の成田国際ホールで脳神経外科の市民公開講座を開催、計350人に参加いただいた。

冒頭のご挨拶で宮崎勝病院長から、予想を上回る多数のお申し込みにより受付初日で数百人をお断りせざるを得ない状況になったこと、感染症対策を万全にしながら本日の開催に至ったことなど言及があった。

講演は、松野彰統括主任教授による「認知症とホルモン」からスタートし、脳神経外科部長・河島雅到教授は「脳のできものについて」、山根文孝教授は「脳卒中のおはなし」、末廣栄一教授は「頭をぶつけた！大丈夫？」、下地一彰教授は「赤ちゃんの頭の形が気になったら」など、それぞれの専門分野について5人の医師がわかりやすく解説、脳神経外科の盤石な新体制をご紹介できる好機となった。今回参加できなかった方のため、第2回の開催が10月16日に決定している。(国際医療福祉大学成田病院 広報室)



●松野統括主任教授の講演

学生3人に人命救助で感謝状

交通事故に遭うおそれのあった男性を救助したとして、大田原キャンパスの1年生3人に5月6日、大田原警察署から感謝状が贈呈された。

感謝状を受けたのは、いずれも理学療法学科の1年生、山木遥介さん、藤春鉄馬さん、会田壮一朗さんの3人。4月22日の午前0時半ごろ、山木さんの家で解剖学のテスト勉強を終えたあと、唯一車を所有していた山木さんが藤春さんと会田さんを自宅へ送り届ける途中、道路に倒れていた36歳の男性を発見。男性に声をかけたものの、意識がはっきりしていなかったため、消防署と警察署に通報。救急隊と警察官が到着するまで、男性の容態を確認して安全を確保し、交通事故の防止に貢献した。

3人は、4月の入学時に理学療法学科のオリエンテーションで、一次救命法(BLS)の研修を受けており、その指導もあつて行動することができたという。感謝状を受け取って、「今後も勇気をもって人を助けることができる」と話していた。(大田原キャンパス入試広報室 深澤耕太)



●感謝状を贈られた3人。右から会田さん、山木さん、藤春さん

国際医療福祉大学熱海病院

土石流災害の対応で地元と連携、貢献

災害拠点病院として静岡県から指定を受けている当院は、7月3日に熱海市の伊豆山地区で発生した土石流災害に際し、さまざまな活動を行って地元と連携し、貢献した。当院は被災地区から少し離れていたため、幸い被害を受けることなく患者様、職員ともに無事であった。

発災当日、院内に災害対策本部を発足。当院のDMAT(災害派遣医療チーム)隊員が地域の被災状況の情報収集を行い、被災した患者様の救急受け入れ



●土石流災害当日の災害対策本部の様子

れが円滑に行われるよう救急体制をはじめとする院内体制整備を行った。また、災害により通行止めとなった国道135号線に代わり、緊急車両のみ通行可能な熱海ビーチラインに透析患者受け入れのための運行調整を行うなど、災害医療に加えて広域的な対応をした。

今回の土石流災害の被災者が滞る避難所には、当院のDMATが熱海保健所の要請を受けて出動し、まず看護師らが医療相談や新型コロナウイルスの感染対策にあたった。

当院に搬送された被災者にも、丁寧に対応した。

その後、熱海保健所を中心に立ち上がった「保険・医療・福祉合同調整本部



●受け入れ体制をとる救急外来

会議」では、日本DMATとしての経験が豊富な皮膚科の堀内義仁教授を中心に、当院の地域医療連携室が全面的に協力。避難所での感染対策やリハビリテーションなど課題の解決に取り組み、被災者が安心して暮らせるよう支援した。

これに先がけ、5月19日に熱海市と当院は、大規模災害などの非常時に、優先的に医療用上水が供給される「非常時における医療用上水の緊急給水に関する協定書」を締結し、記者会見を行っている。

当院は、2019年4月1日に静岡県で23番目となる災害拠点病院の指定を受け、重要な役割を担ってきた。この協定締結により、災害時に断水した場合でも別の3か所から水の供給を受けられ、安定的な診療体制を確保できるようになった。

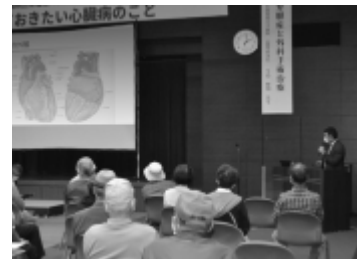
(総務課 村山京三)

国際医療福祉大学病院

市民公開講座、再スタートしました

市民公開講座が再スタートした。コロナ禍でしばらく開催を控えていたが、来場人数を制限し、ソーシャルディスタンス・マスク着用・手指消毒など徹底した感染予防対策で行うよう努めている。

まず、4月24日、心臓外科部長の牛島輝明教授による「知っておきたい心臓病のこと」を開催(写真)。



●牛島医師による講演の様子

心臓弁膜症と治療法をわかりやすく講演、臨場感ある

外科手術の動画に来場者も釘付けであった。

続いて、6月19日に岩淵博史教授(歯科口腔外科)の「お口の中を見てみよう。これって口内炎?この症状ってドライマウス?」、7月31日に福田浩二教授(循環器内科)の「加齢にともなう不整脈、心房細動を見逃さない」を開催。いずれも大好評であった。

今後も、感染症の状況を見ながら、ハイブリッド開催やオンライン配信なども視野に入れつつ、市民公開講座を継続して開催していく。

(総務課 中澤彩乃)

国際医療福祉大学塩谷病院

災害初動訓練を実施

7月17日、本年度第1回目となる災害初動訓練を行った。当院は、栃木県より地域災害拠点病院ならびにDMAT(災害派遣医療チーム)指定病院に指定されており、災害発生時の緊急かつ的確な医療行為を遂行できるよう、塩谷広域行政組合消防本部の協力のもと実施した。

今回は、福島県沖を震源とするM7.8震度6強の大規模地震発生を想定して行われ、搬送される傷病者に検温、トリアージを行い適切な処置室に誘導するなど、職員同士が連携し、緊張感を持って訓練にあたった。今回の訓練を終えて、災害時に一人ひとりがどのように行動するべきか再確認することができた。

(総務・人事課 小室秀明)



●災害対策本部の様子

国際医療福祉大学三田病院

今こそ地固め。「人間ドック健診施設機能評価」

2019年度には人間ドック売上の10%強を占めていた外国人受診者が2020年度にはゼロになるなど、コロナ禍は予防医学センターの業務に多大な影響を及ぼした。今こそ、健診機能の質を高め一層魅力を高めようと、日本人間ドック学会の「人間ドック健診施設機能評価Ver.4.0」の受審に取り組んでいる。

「自己評価」も含めた書類の事前提出を2021年6月に済ませたが、関係職員一同が自らの業務を振り返る



●プロジェクトメンバー同

なかで、本評価の目的のひとつ、「継続的な改善活動を積極的に行える施設へと導き、ひいては施設の質の向上を図る」ことを、自分ごととして実感することができた。現在は、9月に予定されている訪問調査の準備に丸となって取り組んでいる。

認定されたあかつきには、より満足度の高い健診を提供できる組織となることを確信している。

(保健医療サービス部 加藤千博)

国際医療福祉大学市川病院

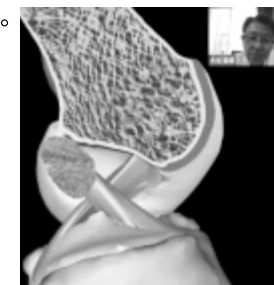
大谷俊郎病院長による中学校・高等学校向け講演

7月9日、バスケットボールなどの部活動が盛んな昭和学院中学校・高等学校と当院をオンラインで結び、大谷病院長によるオンライン講演会を実施した。

テーマは「成長期のスポーツ外傷・障害」。学校側の受講者は、部活動の指導者や関係者。コロナ禍から学校側は部単位での分散視聴となり、複数の受講会場を結んでの開催となった。昨年より、医師や医療従事者とをオンラインで結び、医師が講演を行うオンライン地域医療連携会議を6回にわたり開催してきたが、学校を対象とするのは初の試み。講演は質疑応答をあわせて約60分で、部活動ならではの質問もあり、特に若手教員からの質問が相次いだ。

他校からの依頼も受けており、これから市川市内の私立学校での講演が予定されている。

今回の講演テーマは、「第7回オンラインけんこう講座」として市川市民にも公開され、今後も成人・高齢者向け医療に加えて学校・教育機関を当院の新たなチャンネルとするよう取り組んでいく。



●昭和学院への講義画面

国際医療福祉大学成田病院

第2回ドクターヘリ訓練を実施

7月19日、災害拠点病院をめざす当院では、2回目となるドクターヘリ離発着訓練を行った。この訓練は、同じ千葉県内にある日本医科大学千葉北総病院のご協力を得て実現したもので、第1回目は開院1年となる今年の3月に実施した。救急科の志賀隆部長(医学部・救急医学主任教授)がERから患者様の緊急搬送をドクターヘリホットラインへ連絡し、看護師とともに同乗した救急車で当院敷地内のヘリポートで待機、ドクターヘリが到着次第患者様を引き渡す、という一連の流れを確認した。



●訓練の様子(右から3人目/救急科部長・志賀隆教授)

当院では、今後成田市をはじめとする千葉県の地域医療に災害拠点病院として貢献していくため、速やかな救命医療と、災害時にも力を発揮できる迅速な初動対応の実現をめざしている。

(広報室)

医療法人財団 順和会

港区集団接種(64歳以下)会場を運営

順和会では7月5日より、国際医療福祉大学東京赤坂キャンパスW棟にて64歳以下の港区集団接種会場を運営している。本会場は港区の要請を受ける形で、順和会と大学の職員が協同で運営しており、7月は9階のみで420人/日の接種を行い、8月からは会場を9・10階に拡張、840人/日の接種に対応している。初めての大规模接種会場運営にあたり、各専門職で入念に準備やシミュレーションを行った結果、大きな混乱もなく順調に運営することができている。

当グループでは、本会場のほか国際医療福祉大学三田病院も港区集団接種会場の運営に携わっており、会場では「医療機関が運営しているので安心。スムーズに接種を受けることができた」など高評価の声が多かった。また、医療機関として集団接種会場運営に協力することで、地域医療に貢献でき、港区からは多大な感謝の言葉をいただいた。

(山王病院総務課 山本悦子)



●接種会場の入口

国際救急部 (成田キャンパス)

最高の仲間と活動「楽しむ」、 競技会「メディカルラリー」で 救急技術を磨く

初めまして、国際救急部です！
最近、「救急サークル」から昇格し、現在は約90名で活動しています。オンライン活動が始まった昨年度からさらにパワーアップして、今年度は毎月さまざまな企画が開催されています。

そんな国際救急部を知っていただく上で、今回は、大事なエッセンスを3つ挙げさせていただきたいと思います。

ひとつ目は、すでに触れましたが、活動内容が充実していることです！

まず、大前提として、私達の活動は「楽しむ」をモットーにしています。基本的には、学生間での勉強会が多く、今年度は、救急疾患を理解するために必要な基礎医学、救急現場で心停止を引き起こす疾患である「6H6T」(外傷は除く)、臨床推論、そしてJPTEC/ICLSとシナリオベースの勉強会、等を定期的に開催しています。また、中高学年向けの少しハイレベルな勉強会や、救急科の先生をお招きしての会も臨時で開催しています。

そして、ふたつ目はこの部の代名詞とも言える、『メディカルラリー』です！

メディカルラリーとは、一言で「救急医療技術の競技会」のことで、私達は、IUHWの学生向けに学内メディカルラリーの開催を企画しています。

対面活動が難しいなかですが、今年の3月には、簡

単にはありますが、練習会を開催することができました。各チームともたくさん準備したことで、とても素晴らしい会となりました。現在も、先生方含め多くの方々のお力をお借りし、10月にメディカルラリー本番を開催するため、参加者・運営、チーム一丸となって準備中です。



●練習を終えたサークル運営メンバー

最後の3つ目は、部員が最高、ということです！

なかなか対面で活動ができないなかでも、何かできることはないか、オンラインを活かすならどうしようか、など、苦境に負けず、次へ！次へ！とやる気に満ちた頼もしい部員達が国際救急部には沢山います。

先輩方も面倒見の良い方々ばかりなので、先輩後輩関係なく、和気あいあいとしているところも、この部の素敵なおところではないかと自負しています。

まだまだ若く、発展途中ですが、今後も一歩ずつ、「楽しみ」ながら、救急医療への理解をさらに深めていきたいと思っています。これから国際救急部をどうぞよろしくお願いいたします！





医学部医学科2年 籠宮有理菜



●メディカルラリーの参考動画の撮影で

市民公開講座のご案内

国際医療福祉大学の附属病院で9月以降に開催予定の市民公開講座をご紹介します。

開催日	施設	講演テーマ、講師	
9月18日(土) 14:00～15:30	栃木県 国際医療福祉大学 塩谷病院 ※会場は国際医療福祉大学 塩谷看護専門学校 講堂	「関節の痛みはありませんか？ ～健康寿命を延ばすために～」 講師：菊池 駿介 整形外科医長、国際医療福祉大学 病院講師	
9月27日(月) 公開開始	栃木県 オンライン 国際医療福祉大学病院 ※ホームページで 収録動画を公開	「女性のライフステージとリプロダクティブ ヘルス～今こそ考えてみませんか、 月経のトラブルについて～」 講師：柿沼 敏行 産婦人科部長、リプロダクションセンター副センター長 国際医療福祉大学 医学部教授	
10月2日(土) 13:00～15:00	千葉県 国際医療福祉大学 成田病院 (健診棟4階 成田国際ホール)	「こどもに関する悩みにお答えします ～聞いてみたい4つの素朴な疑問～」 小児科部長・藤井 克則(本学医学部 小児科学 主任教授)をはじめとする小児科医4名が各専門分野について解説。 ①こどものけいれん ②学校に行きたくないと言われたら ③お熱が出た時に考えること ④小児救急医から夜間受診のポイント	
10月16日(土) 13:30～15:30	千葉県 国際医療福祉大学 成田病院 (健診棟4階 成田国際ホール)	「頭が痛くなったら、手足がしびれたら… ～知ってほしい脳のお話し～」 松野彰(国際医療福祉大学 脳神経外科統括主任教授、本学 医学部教授)をはじめ、脳神経外科医6名による講演の第2弾。	

好評につき
追加開催!

市民公開講座は、新型コロナウイルス対策を徹底して開催していますが、今後の状況次第でオンラインに変更、または中止、延期する場合がございます。講演テーマ等は変更になる場合がございます。各病院のホームページで最新の情報をご確認ください。

International University of Health and Welfare **IUHW CONTENTS** vol.126 September 2021

2/7 **特集 コロナ対策 in IUHW**

特別インタビュー 和田耕治教授／加藤康幸教授／松本哲哉主任教授／矢野晴美教授

感染防止策 オリンピック・パラリンピック大会へ医療スタッフ派遣／那須マロニエホテルが喫選手団受け入れ／赤坂山王メディカルセンターと大学共催の市民公開講座

ワクチン接種 各病院・キャンパスでの集団接種、職域接種への取り組み／熱海病院で土石流災害の被災者らにワクチン接種

8/9 **夏のオープンキャンパス・説明会**

大田原キャンパス／成田キャンパス／小田原キャンパス／東京赤坂キャンパス／大川キャンパス

10/11 **トピックス** あいおいニッセイ同和損害保険奨学生認証式／下川副大学院長の国際共同研究論文、欧州の著名学会誌に掲載／小田原キャンパスにお城の回遊路／大田原キャンパスの理学療法学科に「2021年運動器の健康・日本賞」／成田病院で脳神経外科の市民公開講座／学生3人に人命救助で感謝状

12/13 **施設インフォメーション** 熱海病院／国際医療福祉大学病院／塩谷病院／三田病院／市川病院／成田病院／順和会

14 **キャンパスプラス1 クラブ・サークル紹介** 国際救急部(成田キャンパス)

15 **市民公開講座のご案内**

2021年度キャンパスイベントのご案内／臨床工学特別専攻科に高まる注目

2021年度 キャンパスイベントのご案内

今年度の9月以降に開催する予定のオープンキャンパスおよび説明会の日程です。

新型コロナ感染対策を徹底し、事前予約制にて、原則として対面形式で実施します。

学科の特長や資格取得のプロセス、キャンパスライフ、

入試制度など、本学の学びを知り、体験していただける絶好の機会です。来場者プレゼントなど、参加特典もあります。

詳細はホームページでご確認のうえ、

ぜひご来場ください。

<https://www.iuhw.ac.jp/oc/>



●ようこそオープンキャンパスへ



●総合ガイダンス



●参加特典:来場者プレゼント

<オープンキャンパス、説明会 9月~11月>

大田原キャンパス	成田キャンパス	東京赤坂キャンパス	小田原キャンパス	大川キャンパス	大学院
オープンキャンパス 10/2(土)	オープンキャンパス 9/19(日) ※医学部除く 学部・学科説明会 10/9(土) ※医学部除く	学科別 オンライン説明会 9/26(日)	オープンキャンパス 9/19(日) ミニオープンキャンパス 10/3(日) ミニオープンキャンパス 11/7(日)	入試対策講座 10/9(土) 薬学フォーラム 10/10(日)	オンライン オープンキャンパス 11/7(日)

※なお、今後の状況次第で、内容を一部変更、もしくはWEB上での開催に変更する場合がございます。必ず最新情報を本学ホームページでご確認ください。

臨床工学 特別専攻科に 高まる注目

最先端のECMO(体外式膜型人工肺)など、コロナ禍で注目された数々の医療機器を専門的に扱う臨床工学技士。「医療現場のエンジニア」として救命医療をテーマとした民放テレビのドラマにも登場するなど、すっかり知名度が高まってきた。

臨床工学技士は高度な医療機器全体を管理し、最新の心臓外科手術から人工透析まで幅広い分野をカバーする。現在の医療に不可欠なスペシャリストとして、活躍の場



●成田キャンパスで4年生向けに臨床工学特別専攻科をアピール

が広がっている。

成田キャンパスで7月末に開かれた医学検査学科4年生対象の就職・進路説明会では、臨床工学特別専攻科の小野哲治准教授の「臨床工学技士を知っている人は?」という呼びかけに、大半の学生が手を挙げた。



●本学のシミュレーション機器を使った臨床工学特別専攻科の授業

本学の特別専攻科では、経験豊富な指導陣と本学ならではの充実した実習施設、多職種連携の学修環境により、1年間の学びで即戦力となる人材育成をめざす。キャリアアップをめざすグループ施設職員には手厚い奨学金制度も整うなど、学内・グループ内からも期待されている。

(成田キャンパス広報室 山本秀也)